

看護学生の「教育学」講義からの学びについての考察 —『保健医療従事者のための「教育学」』をテキストとして—

*A consideration of nursing students' learning from "Pedagogy" lectures
"Pedagogy" for health care workers as textbook*

土井 進

長野保健医療大学大学院 非常勤講師

要旨：2021（令和3）年度に長野保健医療大学大学院 保健学研究科修士課程が開設され、「保健医療教育論」と「保健医療教育実践論」を担当したことを契機として、『保健医療従事者のための「教育学」』をテキストとして編集発行した。このテキストを活用して、2022（令和4）年度に長野看護専門学校と小諸看護専門学校で「教育学」の講義を担当した。看護学生が「教育学」講義を通してどのような学びを得たかを、小論文の言説を分析することによって明らかにした。学生が小論文で取り上げたタイトルは、「人間形成の産屋、家庭教育」「学びの3つの柱と人間形成」「主体的・対話的で深い学びを具現化する学習方法」「教育の目的・目標、内容・方法」が多かった。どの小論文においても学生が、「教育学」を看護師の視点から学んでいることが明らかになった。また、「教育学」を自己の人間形成の糧として主体的に学んでいることが大きな特色であるといえる。

キーワード：看護学生、教育学、保健医療従事者

ABSTRACT: In 2021, Master's Program of Health Sciences, Graduate School of Nagano University of Health and Medicine was established, and taking the opportunity of being in charge of "health and medical education theory" and "health and medical education practice theory", "Pedagogy" for Health Care Workers was edited and published as a text. Using this textbook, I was in charge of lectures on "Pedagogy" at Nagano Nursing College and Komoro Nursing College in 2022. By analyzing discourses in their essays, we clarified what kind of learning nursing students gained through lectures on "education". The titles of the essays that the students took up were: "Birthplace of character formation, home education", "Three pillars of learning and character formation," "Learning methods that embody proactive, interactive, and deep learning," and "Purposes and goals of education, content and method" were the most common. In every essay, it became clear that the students were learning "education" from the nurse's point of view. In addition, it can be said that one of the major characteristics is that students learn "education" on their own initiative as a source of self-development.

Key words: nursing student, pedagogy, health care workers

1. 本稿の目的

2021（令和3）年度に長野保健医療大学に大学院保健学研究科修士課程が開設された。それとともに「保健医療教育論」（必修）と「保健医療教育実践論」（選択）を、次の4名で担当することになった。福谷保（理学療法学）・外里富佐江（作業療法学）・林かおり（看護学）・土井進（教

育学）。初年度の講義を振り返り、授業改善の基盤とするために、4名で『保健医療従事者のための「教育学」』（2022）と題するテキストを編集し、株式会社医療タイムス社から刊行した。

筆者は本書を教科書として使用し、2022（令和4）年度の長野看護専門学校（2年生31名）と小諸看護専門学校（2年生33名）の「教育学」講義を担当した。看護師をめざす64名の学生が、「教育学」講義から何を学んだのかを明らかにするために、小論文の言説を分析した。これによって明らかになったことを次年度の授業改善に資

することが、本稿の目的である。看護学生が小論文の課題に設定した授業項目とその学生数は、表1の右側の欄に記載した。13回目と14回目は、学生が小論文の問題文を作成している最中であつたので、該当学生は0となっている。

なお、本稿において看護学生の言説を引用するに当たっては、両校の2年生の了解を得るとともに、両校の副校長先生・教務主任先生の許可を得たことを明記する。

2. 「教育学」講義のシラバス

看護学生の事前学習の課題は、授業タイトルの教材を読み、最も心に響いた箇所を引用して200字原稿用紙に考察することである。記入した200字原稿用紙を友人同士で読み合わせ、「一言コメント」を欄外に記入して提出する。学生の事前学習に筆者の評価コメントを記入して翌週に返却し、「教育学」の学習への動機づけとした。この事前学習は14回分を20点満点で評価した。15回分の授業タイトルを記入した「教育学」講義のシラバスは、表1の通りである。

毎回の事前学習に記述された看護学生の考察は、主体的・個性的であり、しかも看護師を目指す意欲に満ちた内容であつた。この学生たちの思考力・判断力・表現力のさらなる育成を図

るために、小論文の試験問題の作成を学生の主体性に任せるのがよいと考えた。授業回数が10回を過ぎたところで、このことを教務主任先生に相談し了解を得た上で、小論文の試験問題は、「教育学」講義の中で最も有意義であつたと思う内容を一つ選び、学生が自作することにした。学生の自作問題を筆者が添削し、学生は返却された問題を清書して自己の小論文の課題とした。学生は確定した自己の小論文課題について800字で下書したものを重ねて添削を受けたのち、50分間の本試験に臨んだ。

こうすることによって誤字脱字の無い、美しい手書きの答案に仕上げるように指導し、小論文は80点満点で評価した。

3. 看護学生の「教育学」講義からの学びについての考察

3-1. 人間形成の産屋、家庭教育

「教育学」講義において、人の累代の人間形成に及ぼす影響が大きいことを学んだ学生は、祖母といっしょに生活したなかで身に付けた生活体験が、非常に有意義な学びであつたと振り返っている。また、福沢諭吉の「家庭は習慣の学校」であるという炯眼から躰について深く考察した学生もいる。

表1 看護学生のための「教育学」のシラバス

回	テキストの授業タイトル	小論文の授業 タイトル数
1	人間形成の産屋、家庭教育 ⁽¹⁾	6
2	人間性の座―「知・情・意」を司る大脳前頭前野― ⁽²⁾	4
3	「学びの3つの柱」と人間形成 ⁽³⁾	9
	生涯学習社会とリカレント教育	2
4	「主体的・対話的で深い学び」を具現化する学習方法 ⁽⁴⁾	10
5	学習の原理―直観、自発性、内発的動機付け、練習― ⁽⁵⁾	9
	教育の目的・目標、内容・方法	7
6	聖徳太子の「十七条の憲法」―人間性の善と悪― ⁽⁶⁾	2
7	貝原益軒の道德教育論と養生思想 ⁽⁷⁾	3
8	二宮尊徳の実学思想 ⁽⁸⁾	4
9	ヒポクラテスと『サレノ養生訓』 ⁽⁹⁾	1
10	親鸞・道元・日蓮にみる「知・情・意」の教育者像 ⁽¹⁰⁾	2
11	『塵劫記』の「三容器の協力関係」と「いじめ問題」への応用 ⁽¹¹⁾	2
12	人間形成における「もの」と「ところ」の相即の妙、物心一如 ⁽¹²⁾	2
13	「田定規」をつくり、思考力・判断力・表現力を鍛える ⁽¹³⁾	0
14	看護師（高度専門職）に求められる「事上錬磨」 ⁽¹⁴⁾	0
15	800字小論文試験	31 + 33 = 64

「私は、人の累代の中で教わることが個人の人格形成に大きな部分を占めていると考える。私は高等学校を卒業するまで、祖母、父母、兄弟と暮らしていた。父母が仕事で忙しかったため、祖母と過ごす時間が長かった。私が成長する中で最も影響を受けた人物は、祖母だと考える。料理、編み物、裁縫など生活していく上で必要な技術を祖母から教わった。また、祖母の生家では豆腐や味噌などを手作りしており、よく一緒に手伝いに行っていた。当時は当たり前のことのように思っていたが、今となっては貴重な体験になったと思う。」

また、別の学生は、「教育学」講義において家庭教育が生涯にわたる人格形成に大きな役割を果たしていることを学び、家庭教育における躾として、「褒められる」ことと「叱られる」ことの両面が肝要であると論じている。

人間の人格の土台は三歳までに形成されるといわれている。幼児期はさまざまな体験を通して、情緒的、知的な発達をとげ、社会性も身に付けていく。この時期の学びについて、私が重要だと考える2つの経験をあげ、考察していく。

まず一つ目に大切だと思う経験は「褒められる」ということである。褒められると誰しもが嬉しいことだろう。子どもは褒められたことはまた繰り返して褒められようと努力をする。一度の成功体験と褒められるという経験が子どもの自尊心を高くし、他のことにも挑戦してみようという意欲を与えるのだ。このことから褒めるという経験は子どもの自尊心を高め、意欲的な子どもを育てるために重要だと考える。

二つ目に重要な経験は、「叱られる」ことだ。叱るというのは、何か子どもが悪いことを行ったときに、愛情を持って何がいけないかを教育することだと私は考える。子どもがいけないことをした時に、きちんと叱ることで子どもは親が何を良いとするかを学んでいる。親が正しく叱れば、子どもは叱られたときに「これは悪いこと」としっかり学ぶことができる。親として子どもの行動の「何がいけなかったのか」「何故い

けないのか」を理解させなければならない。子どもが叱られている理由を理解することができて初めて「叱る」意味があり、善悪が分かる子どもへの成長につながっていくと考える。これらのことから、私は幼児期における親から「褒められる」「叱られる」という経験が人間形成において重要だと考える。子どもにとって最初の先生になるのが親である。そのため、家庭での親の振舞いこそが子どもの人間形成の土台になると考える。

3-2. 人間性の座―「知・情・意」を司る大脳前頭前野―

「教育学」講義において、人間の人間らしさを表す「人間性」とは何か、を説明するために大脳の前頭前野の図を板書し、「人間性」の構成要素は「知・情・意」の3つの側面から成っていることを大脳生理学の知見をもとに説明した。このことを看護師としての自らの生き方、在り方に敷衍した学生は、次のように論じている。

まず、「知」についてであるが、看護師になるためには知識が必ず必要だと私は考える。病気のことや援助の方法、薬の作用、副作用など、沢山の知識を獲得しなければ看護師という仕事は成り立たない。毎日毎日の勉強によって知識を修得する。

次に「情」についてであるが、患者さんの心に寄り添ったり、感情的にならないなど、看護師としての心の広さが重要である。患者さんの感情に寄り添うのも大切な看護である。薬を飲んでいないのを見たときに、怒るのではなく優しく声をかけ、薬を飲んでもらうように接することが大事である。

最後に「意」についてであるが、勉学へのやる気を発揮し、患者さんの援助にあたって、創造性を発揮することに努める。勉学に当たっては、学びたい、知りたいという気持ちがあるに繋がると考える。また、意欲を発揮するためには、楽しいと思うことも大事である。患者さんの援助は、その人のことを知り、個性を理解することによって行えるものだ。今、患者さんに必要な援助は何か、この患者さんはどこまで体を動

かせるのか、などについて頭をフル回転させながら援助することによって看護に創造性が発揮され则认为。私は、人間性を磨き看護師として働きたい。

3-3. 「学びの3つの柱」と人間形成

小中高校の学習指導要領では、「生きる力」をより分かりやすくするために、「学びの3つの柱」として具体化され、授業改善が図られている。看護学生のための「教育学」の学びにおいても、「学びの3つの柱」は有益であると考えて講義した。「学びの3つの柱」を活用して自らの看護師像を描いている学生は、次のように論じている。

学びの3つの柱とは、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性等の涵養の3つの柱のことで、「知・情・意」の調和的発達を目指すものである。私は看護学生として「学びの3つの柱」を活用して学習目標を立て、内発的な動機づけによる学びを重視して、生涯学習にまで高めていきたいと考えている。私は看護専門学校に1年間通ってみて、看護師になる道のりがいかに困難であるかを、日々体験している。

人間性の構成要素である「知・情・意」の3側面から、私は学びに3つの目標を立てている。一つは、高度専門職である看護師が身に付けなければならない知識・技能を身につけ、患者の置かれている状態を理解することである。

二つは、人が人に対して畏敬の念をもつ人間尊重や、生命の尊厳の本質を知り、患者の思いや背景に寄り添った療養方法を共に考え、患者に合ったケアを行うことである。

三つは、自己を知り、これまでの社会生活で得た知識や経験を基に、補い高めながら、患者の健康的な生活のために自分の心身を使い、使命を果たすことである。

これらの3つの目標を達成するために、学んだ知識が身に付くまで繰り返す。私はこの三つから成る看護師像を心に描き、看護師になるという強い内発的動機づけをもって、看護学生としての生活を送ってい

こうと考える。それが看護師となつてからの生涯学習の基盤となると考える。

3-4. 「主体的・対話的で深い学び」を具現化する学習方法

学習指導要領においては、アクティブ・ラーニング（Active learning）という言葉の持つ活動的な意味が強調され過ぎるのを避けるために、「主体的・対話的で深い学び」という表現が用いられた。主体的な学びとは、学ぶことに興味関心を持ち、自らの学習をまとめて、次の学習につなげるような学び方である。対話的な学習とは、学生同士の対話に加え、学生と教員、学生と病院関係者、そして書物を通して過去の人物たちとの対話を図ることが考えられる。そして、深い学びとは、自ら見出した課題を追求し、探究的な学びに取り組むことである。

「教育学」講義においては、事前学習の200字原稿をペア学習で「一言コメント」を記入する。また、毎時間必ず3～5人のグループに分かれてテキストを輪読し、意見交換する時間を設定してきた。このような学習方法によって、学生は「自分の意見を持ち、それを相手に伝え、考えたことを行動へと移せる力」「適切なコミュニケーションをとる力」そして、「自ら意見や感想を話したことで、相手の話にもより興味を持つことができ、相手が話している時には、うなずいたり、分からないことは質問することが増え、傾聴力が確かに」身についたと考察している。

私は、アクティブラーニングのような学びを行うことで、自ら考え、行動する力が身に付くのではないかと考える。目の前の問題に対して、自分の意見を持ち、それを相手に伝え、考えたことを行動へと移せる力が、看護師には必要である。この力は、自ら考え、自分以外の人と考えを共有することで身に付く力なのである。自ら考え、行動する力は、看護師にとって、非常に重要なものであることを実習を通して学んだ。患者の状態を観察し、今患者に必要なケアは何かを自ら考え、仲間と共有し、行動へと移していく。このように考えて行動する力が無ければ、看護師の仕事は成り立っていないと考える。知識を身に付ける学習

とともに、思考力、創造力、行動力を身に付けるための「主体的・対話的で深い学び」は、看護師にとっての重要な学習である。

また、グループワークやディスカッションを行うことで、コミュニケーション力を身に付けることもできる。自分の意見を正しく伝えるために伝え方を工夫する。そして、相手の思いを知ろうと相手の声に傾聴する。こうした行動を、グループワークなどのなかで自然と取るようになることで、コミュニケーション力が養えると思う。

以上のことから私は、「主体的・対話的で深い学び」によって、自ら考え行動する力、適切なコミュニケーションをとる力を身に付けた看護師へと成長していくことが可能であると考え。

さらに別の学生は、「主体的・対話的で深い学び」の実践によって会得することができた資質能力を次のように明らかにしている。

昨年度の学内実習や今回の基礎看護学実習でのカンファレンス、並びに演習では積極的に発言し、感想を述べることができた。それにはグループでの対話の際、「〇〇さんはどうですか?」とグループの人が話しかけてくれたこと、また演習の際は、隣に座っていた友人が積極的に意見や感想を発信していたことで、私も自分から意見や感想を発信していこうと思うようになったのである。そして、自ら意見や感想を話したことで、相手の話にもより興味を持つことができ、相手が話している時には、うなずいたり、分からないことは質問することが増え、傾聴力が確かに成長したことを実感することができた。

3-5. 教育の目的・目標、内容・方法

教育の目的は、人間形成において目指すべき方向を示す理念である。教育基本法第一条にある「人格の完成」は、人間形成において目指すべき方向を示している。これに対して教育の目標は、教育の目的が指し示す方向に向かって具体的に前進するための一里塚であるといえよう。教育の目標は、到達することが可能であり、達成目標として明確に策定することが求められる。

目標を達成するために用意された教材が教育の内容であり、その内容をどのように学習するか、が教育方法である。内容と方法は密接につながっている。

ある学生は、看護の基礎実習という教育内容を修得するための方法として、「グループワーク」に取り組んだ。その学習成果として「結束力が高まる」「自己効力感が高まる」「意思決定力や判断力が身に付く」「協調性が育まれる」など、実に多くの学習成果を上げている。次にこの学生が取り組んだ「グループワーク」の学習方法について紹介する。

グループワークの利点はたくさんある。まず、自分の意見を他者に伝える力が付く。内容を把握し、頭の中でまとめ言葉にする。これは難しいことであり、日常生活で簡単に身に付くことではない。一つのテーマについて討論するとなれば、一人一人の意見が重要になる。さらに皆で協力することで結束力が高まり、やればできるという自己効力感も高まる。さらに物事についてのメリットやリスクを考えながら結論を出すにあたり、意思決定力や判断力が身に付く。

看護師として働くとき、自分だけでなく他者の意見も受け入れることが大切である。看護専門学校の授業で「グループワーク」を取り入れているのは、協調性を育み、自分の意見を伝えるだけでなく、他者の意見も参考にでき、協力し合って一つの答えに結びつけられる力をつけるためだと考える。社会に出た時に「グループワーク」の経験は活かされるであろう。そして、さまざまな考え方があることを知ることができるので、想像力も豊かになる。今後も「グループワーク」に積極的に取り組みたい。

3-6. 聖徳太子の「十七条の憲法」—人間性の善と悪—

「十七条の憲法」に用いられた4つの「悪」とその英訳語「bad」・「evil」・「wrong」・「bad」から、太子の人間観・教育観を汲み取ることを意図した「教育学」講義を実践した。聖徳太子は、人間には「間違い」や「過ち」wrong はつきものであるから、「wrong」は、よく教えることによって正すことができる。しかし、他人の善を匿(か

く) するような「悪質」な「evil」や「bad」に対しては、正すことができないので、懲らしめなければならないと説いている。ある学生は、太子が悪は懲らしめ善は勧めよ、と説いている箇所共鳴するとともに、具体的な人間形成に結び付けるには、手本となる生きた人間像が欠かせないと論じている。

私が大切に思っている条文は、第6条の「悪を懲らしめ善を勧むるは、古の良き典なり。ここをもつて、人の善を匿すことなく、悪を見てはかならず匡せ。」という箇所である。これは人間を形成する上で、とても重要な文であると考え。ただし、私は人間を形成することに必要なのは、条文だけではなく、その教えを理解している人間も必要だと思う。人間を形成していくのは、文字や文章ではなく、それを理解している人間が、何も知らない人間を導くことによって、また良き人間が形成されていくのだと考える。

私が考える人間は、条文を読むだけでは理解した気持ちでいても、実は全く理解できていなかったり、実感が湧かないものであると考える。しかし、善行や悪行を体験すると、何が善で何が悪か、何はしてもよくて、何はしてはならないかをはっきりと理解することができる。つまり、教えを説く条文とともに、それを教える生きた人間が必要なのである。私の考える人間形成とは、人間を形成する条文とその意義を深く説くことのできる生きた人間からなると考える。

3-7. 貝原益軒の道德教育論と養生思想

筆者の恩師高田豊寿先生は、益軒を次のように評された。「とてもいい顔をしている。教育者はこういう風格を持ちたいものだ。これはま真つ当な人だ。」

貝原益軒(1630-1714)は、筑前(福岡県)黒田侯の祐筆の家に生まれ、三代の藩主に仕えた。『養生訓』などの益軒十訓とよばれる教育書は、70歳で致仕(退職)してからの10年間で書き上げられた。蒲柳の質であった益軒は、養生に努め、85歳の長寿を全うした。益軒は『養生訓』において、欲が適切に満たされることを大切に、

「楽」と呼んだ。また、完璧主義を嫌い、「いささか」でよい。むしろ「いささか」がよいとした。

貝原益軒の『養生訓』から現代に生きる指針を得た学生は、次のように論じている。

私は「教育学」の授業の中で、貝原益軒が一番印象に残った。中でも貝原益軒の考え方で心に残るものが2つある。

一つは、全ての事において完璧を求めすぎると、かえって心の負担になり、身体、精神衛生上よくないという考えだ。私はどちらかという物事を完璧に進めようとする癖があり、いったん物事が自分の計画通りに進まなくなると、一人で考えこんでしまったり、反省しすぎてネガティブな気持ちになってしまうことが多々ある。しかし、益軒は完璧を嫌い、「いささか」でいいと言っている。全てにおいて完ぺきをもとめてしまうと、きりがなく、「いささか」でおさめることで、全てにおいてゆとりをもつことができる、ということを『養生訓』を読む人に伝えたかったのではないかと私は考える。私はこの考えを基に行動をし、心身に過剰なストレスを与えることなく、日々の学業や生活に生かしたいと考えた。

二つは、自分の慾を大切にするということである。益軒は人間の本能的欲求や喜怒哀楽などの情動的な欲求はおさえ、その欲求をスポーツや勉学など、別の欲求に転換させたものを大切にすべきだと言っているのではないかと私は感じた。人の本能的欲求や情動的欲求を表に出すという行為は、何よりも心にも体にも負担がかかると考える。それらを一種の「ストレス発散」として、自らの為に知識を増やす、心身を鍛え、肉体的な高みをめざす。そのような欲求こそが益軒の考える「欲」を大切にすることではないかと私は感じた。私はこの2つの言葉を胸に秘め、常に自己研磨に勤しみたいと思う。私はこれから先看護師として働くが、これらの言葉を忘れずに常に学び続けていきたいと考える。

3-8. 二宮尊徳の実学思想

二宮尊徳(1787-1856)は、幼年にして父を喪

い、母も喪って、困窮のどん底から身を起こした。その生き方を内村鑑三は「勇ましい高尚なる生涯」と讃えた。小田原の藩主は田んぼの中で農作業に勤しむ尊徳の姿を、「田中に飛電あり」と称えた。極貧から身を起こした尊徳の生き方から生まれた「小を積んで大を為す」が尊徳の畢生の哲学である。この言葉に感銘を受けた学生は、看護学生の立場から「小を積んで大を為す」哲学の人間形成的意義について、次のように論じている。

尊徳は「譬えば百万石の米と雖も粒の大なるにあらず。万町の田を耕す者の業は一畝ずつの功にあり。千里の道も一歩ずつ歩みて至る。小さなことを忽せにする者、大なる事は出来ぬものなり。」と説いている。

では現在の私におきかえたとき、「小を積んで大を為す」とは、どういうことを言っているのでしょうか。私は今、看護専門学校の2年生という立場にいる。私にとっての「大」は、看護師になるということだ。「小」とは何か、と考えると看護師になるための道のりのことではないか、と考える。毎日の授業は看護師になるための知識を身に付ける重要な場である。技術テストも今後患者さんに看護を提供するためには、必要不可欠なものである。楽しくも厳しくもある実習も現場で働くとき、どんなことを毎日看護師さんが行っているのかを学ぶ機会である。これらは看護学校の中での出来事である。他に毎日休まず看護学校に行くということも「大」を叶えるためには、大切な積み重ねの一つと考えられる。

次に日常生活の場面で考えてみる。私は現在一人暮らしをしている。1年前は、ほとんど親にまかせきりで、今親のありがたさを痛感している。一人暮らしを始めて一年が過ぎ、怖れなくなってきた。ときに失敗があるからこそ、小さな積み重ねが人間形成をしていくうえで大切であることに気付かせられる。

私は二宮尊徳の「小を積んで大を為す」という考え方は、人間形成においてとても大切な考え方であると思う。もし、「大」を為すことができなかったとしても、今ある

自分が、前の自分より少しでも成長していると思えるような生活を送りたいと思う。

3-9. ヒポクラテスと『サレルノ養生訓』

ヒポクラテス（前460–前375）Hippokratesは、古代ギリシャの医師で医学の祖あるいは医術の父と称せられる。彼の施す医術は、人間に備わる自然治癒力を引き出すことに焦点を当てたものであり、休息、安静が最も重要であると説いた。

サレルノはイタリアの港町ナポリの南にある自然環境の素晴らしい健康的な町である。ここに人が集まり、医師が集まり、ヨーロッパ最初のサレルノ医科大学が誕生した。サレルノはヒポクラテスの町として全ヨーロッパに知られていて、この町で『サレルノ養生訓』が出来上がっていった。

ヒポクラテスの医学の中心に位置づく自然の食餌法と「朝には山を仰ぎ見、夕べには泉の水を見よ」という詩に着目した学生は、次のように論じている。

『サレルノ養生訓』では、健康で長寿を全うするためには、快活な心、休息、適度な食餌が大切であると説かれている。ヒポクラテスの医学の中でも食餌法が医学の中核をなしていると述べられている。食餌を摂るという行為は、人間がこの世に生を享けてから一生続いていくものである。そのことから食餌は人にとってなくてはならないものであり、いかに大切であるかが分かる。自分の好きな物ばかりを食べていたら、その時は幸せであろう。しかし、塩分、脂肪分、糖分などを摂り過ぎてしまうと、身体に数値として現れる。人の身体は正直なもので、栄養のバランスが崩れると、それは身体の不調となって内面から外へ出てくるのである。何事も適度が良く、バランスの良い食餌が人を健康へと導く第一歩であると考えられる。

また、ヒポクラテスは病気とは自然から生まれたと述べた最初の人物である。自然環境が豊かでない場所では、人の精神も身体も健康にはなれない。自然と共に休息を取ることが大事である。安静療法という治療があるように、人の身体は休息が必要で

あると感じる。睡眠と休息をしっかり取ることが、働き過ぎと言われる現代の人たちに必要なことではないだろうか。

『サレルノ養生訓』の中で「朝には山を仰ぎ見、夕べには泉の水を見よ」という詩がある。朝は山を見上げることで活力を出し、夕方には泉を見降ろすことで一日の活動を終える。ここに自然と共に生きる人間の本質を感じる。朝日と共に一日が始まり、夕日を見ながら一日の活動に終わりを告げる。そのように自然に沿った生活リズムを備えていくことが、本来の人間の正しい生き方であると感じた。

3-10. 親鸞・道元・日蓮にみる「知・情・意」の教育者像

唐澤富太郎は、鎌倉時代の仏教思想を代表する親鸞・道元・日蓮の人間観・教育観について探究し（表2）、その人間像の特色から親鸞を「情」の教師、道元を「知」の教師、日蓮を「意」の教師として類型化した。

親鸞の教育観である「同朋同行」の生き方に感銘を受けた学生は、「同朋同行」の現代的意義について、次のように考察している。

私の実家は浄土真宗を信仰しており、私は幼い頃から絵本などで親鸞の名を目にする機会が多かった。菩提寺でも子供会がよく行われていた。しかし、当時は親鸞が具体的にどのような人物であったのか理解できていなかった。今回の「教育学」で学んだことにより、親鸞の考えや行動は現代の組織や人間関係に通じるものがあると感じ、改めて関心を持った。

私が印象深く感じたのは「同朋同行」の態度である。親鸞は「自己を師たり得ない無智愚禿のものである。」と否定し、弟子に対しても自身は教える立場ではなく、弟

子と同等の救われるべき存在であるとしている。あくまでも如来に向かう不完全者として、他の不完全者と共に歩いたのである。その姿勢がそれまで非開放的であった仏教を、民衆まで浸透させたのである。さらに妻帯まですることによって、形態的な僧侶の形をすら無くしている。

親鸞は地位も名誉も全て失ってしまい、頼れるのは妻と如来の前に共に跪いて、「同朋同行」の歩みをしてくれる仲間だけであった。私はこれからどのような地位についてとしても、お山の大将になって独裁的な振る舞いをしたのでは誰も付いてきてはくれないことを肝に銘じ、広い視野と臨機応変の考えを持って看護の仕事に取り組みたい。そして、己の信念を貫いた親鸞の生き方は、この先も私の看護師としての人生において最も尊敬すべき存在になるであろうと考える。

3-11. 『塵劫記』の「三容器の協力関係」と「いじめ問題」への応用

大「10」、中「7」、小「3」の三容器の問題に「協力関係」という名前が付けられた

理由として、次のことが考えられる。

- ① 3つの容器は「水を渡す人」「水を受け取る人」「休んでいる人」の3人とする。
- ② 「水を渡す人」と「水を受け取る人」は、仕事をしている人である。この2人は「休んでいる人」を非難しない。なぜなら次の場面においては、役割が交代し「休んでいる人」も働くからである。
- ③ すなわち、3人の関係において「休んでいる人」も「協力」している内に入ると考えて排除しない。このことによって、「10」「7」「3」のうち、2つの数字だけでは、絶対に生み出すことのできない「1」や「2」という新たな数字が生まれてくるのである。つまり、新たな価値が生まれたことによって問題解決が図られるのである。

「三容器の協力関係」を用いて、病院での「患者」と「医師」と「看護師」の良好な関係づくりについて考察した学生は、次のように述べている。

『塵劫記』の「三容器の協力関係」とは、「大」

表2 親鸞・道元・日蓮の人間観・教育観

人名	人間観	教育観
親鸞 (1173-1262)	愚禿	同朋同行
道元 (1200-1253)	修証一等	百尺竿頭進一步
日蓮 (1222-1282)	諸法実相	不惜身命

「中」「小」3つの容器があり、それぞれの容量は、10、7、3である。今「大」の容器に水がいっぱい入っていて、これを各容器に移し替えながら、「大」の容器に5、「中」の容器に5、「小」の容器に0となるようにするという問題である。この問題は、3つの容器をうまく使わなければ解くことはできない。テキストでは「大」「中」「小」の三容器を「水を渡す人」「水を受け取る人」「休んでいる人」とし、この問題は仲良し3人グループで一人を仲間外れにすることにより発生する「いじめ問題」を解決するヒントにつながるが書かれている。

私は、「大」「中」「小」の三容器の関係を病院内で考え、それぞれ「患者」「医師」「看護師」とした。私たちは身体に異変を感じ病院を受診することで、誰もが「患者」となる。3人の関係において、例えば「医師」と「患者」が検査や治療について話をするとき、「看護師」はその場においても口を出すことは少ないと考える。それは「何もしないで休んでいる」ことではなく、「患者」の表情や仕草を観察し、寄り添っている姿だと考える。また、「医師」と「看護師」が「患者」についてカンファレンスを行っているとき、「患者」は医療者を信頼し、自分と向き合っているのではないかと思う。そして、「看護師」が「患者」のケアを行っているとき、「医師」は「患者」にとって最善の策を考えているのではないか。このように、3人がそれぞれ「患者」の回復を目標に、今できることを行っていると考えられる。このことが、「三容器の協力関係」に通じるものであると考えた。

また、この協力関係は「患者」「患者の家族」「看護師」においても成り立つと考える。いずれにしても「看護師」は他の二人をより良く結びつけるための重要な役割を果たしているといえる。そのために、いついかなるときも周囲にアンテナを張りめぐらし、周りの変化や「患者」の様子に気づける観察力や気づきをもとに行動できる力、そして相手の気持ちに寄り添える優しさや思いやりを身に付けられるように、一日一日を

大切に過ごしたいと考える。

3-12. 人間形成における“もの”と“こころ”の相即の妙、物心一如

教育学者、唐澤富太郎（1911-2004）は、30年間にわたって教育の実物資料を収集し、

自宅に教育博物館を建設した。長年に渡って教育資料を座右に置いて眺める生活を続けてきた唐澤は、“もの”には“こころ”がある、物心一如であるという確信を抱くに至ったという。唐澤のこの言葉に出会って、生活態度が変わったという学生は、“もの”と“こころ”について、次のように論じている。

唐澤富太郎は、“もの”には“こころ”があると述べている。私も植物や鉱物などあらゆるものに“こころ”があると考ええる。長年使ってきた食器や服などに愛着が湧く。私は幼い頃ずっと好きなぬいぐるみがあった。そのぬいぐるみとはどこへ行くにも一緒であるという安心感があった。時には話しかけてみたりと様々な経験を共にした。しかし、そのぬいぐるみに対して殴ったり、投げ出したりしたときは、夜もしかしたら仕返しに来るのではないかと恐怖心を抱いた。これは私自身がぬいぐるみに“心”があると感じたからだ。このように考えると、今使っているシャープペンシルや時計、眼鏡全てが、私自身にとって親しい友人だと感じることができる。また、人形やぬいぐるみなどを様々な事情から仕方なく捨てることになった際に、「人形供養」という方法を行う人もいる。このことから日本古来から“もの”には“こころ”があると考え人々がいたのではないかと考えられる。

私は幼い頃から“もの”は大切に扱いなさい」と、先生や両親など周りの大人から何度も注意された。しかし、現代では「断捨離」という言葉が浸透しつつある。私自身もその言葉の影響でいくつか“もの”を捨ててしまった。現在は昔に比べ“もの”を捨てることに對し、ためらう気持ちが薄くなってしまったと考える。

私は“もの”を捨てるということを今一度考えなおし、コンビニエンスストアなど

でいつも袋をもらっていたが、エコバックを使い始めた。唐澤富太郎が教育に関する実物をたくさん集めることによって、“もの”には“こころ”があることを確信するようになったが、この言葉に出会うことによって私の生活態度が変わった。以上のことから私は“もの”には“こころ”があると考える。

4. まとめ

2021（令和3）年度に長野保健医療大学大学院保健学研究科修士課程が開設された。これに伴い「保健医療教育論」と「保健医療教育実践論」の講義を担当したことを契機に『保健医療従事者のための「教育学」』をテキストとして編集発行した。このテキストを活用して、2022（令和4）年度に長野看護専門学校と小諸看護専門学校で「教育学」講義を担当した。看護学生が「教育学」講義からどのような学びを得たかを、小論文の言説を分析することによって明らかにしようとした。その結果、次の3点が明らかになった。

- ① 看護学生が小論文のテーマとして取り上げた授業タイトルで多かったのは、「主体的・対話的で深い学びを具現化する学習方法」10人、「学びの3つの柱と人間形成」9人、「学習の原理—直観、自発性、内発的動機づけ、練習—」9人、「教育の目的・目標、内容・方法」7人、「人間形成の産屋、家庭教育」6人の順であった。
- ② 看護学生は、どの小論文においても看護師になるという視点から「教育学」を学んでいることが明らかになった。
- ③ 看護学生は「教育学」を自己の人間形成の糧として、主体的に学んでいることが明らかになった。これは本研究によって明らかになった大きな特色であると考える。

謝辞 本稿を執筆するに当たり、小論文の掲載を快諾してくださった看護学生の皆さん、ならびに長野看護専門学校と小諸看護専門学校の教務主任先生に心から御礼申し上げます。

注・引用文献

- (1) 唐澤富太郎ほか（1974）『日本人と教育』帝国

地方行政学会, pp.42-53

福沢諭吉（1959）「教育の事」『福澤諭吉全集第四巻』岩波書店

倉橋惣三（1926）『幼稚園雑草』、『倉橋惣三選集』全4巻（昭和40～42年）、唐澤富太郎（1984）「倉橋惣三—幼児教育の父—」唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』中巻、ぎょうせい, pp.17-18

- (2) 時実利彦（1969）脳の写真の出典『目でみる脳—その構造と機能—』東京大学出版会, p.26
時実利彦（1970）『情操・意志・創造性の教育』第一法規, 教育学叢書20, p.11, pp.135-136, pp.139-141, pp.147-148, p.191
- (3) 平成29年学習指導要領, 小学校・中学校, 平成30年学習指導要領, 高等学校
教育基本法第3条（生涯学習の理念）
学校教育法第30条（小学校教育の目標）における「学力」の定義
日本国憲法第26条（教育を受ける権利）
- (4) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進, 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説, 社会編（平成29年）, pp.3-5
- (5) 篠原助市（1949）『理論的教育学』協同出版, pp.460-461
新井郁男ほか編（2014）「内発的動機づけ・外発的動機づけ」『学校教育事典』第3版
教育出版, pp.610-611
教育基本法, 文部科学省
唐澤富太郎（2005）『愚徹』講談社, pp.78-80
唐澤富太郎（1970）『執念—私と教育資料の収集—』講談社, pp.220-223
- (6) 中村元ほか訳（1970）『日本の名著 聖徳太子』「十七条の憲法」中央公論社, pp.409-415
写真の出典 唐澤富太郎編著（1984）『図説 教育人物事典』上巻, ぎょうせい, p.5
- (7) 貝原益軒著・石川謙校訂（2001）『養生訓・和俗童子訓』岩波書店, 「択医」p.124, 「養生を害するもの—過度と安逸—」p.30, 「内敵に克つには勇, 外敵に勝つには畏」pp.32-33, 「五官は心の家臣」p.101
肖像写真の引用, 唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』上巻, ぎょうせい, p.149
西平 直（2021）『養生の思想』春秋社, p.108
土井進（2018）「英国人外交官 W.G. アストンが高く評価した貝原益軒の道德教育論の特質—“A HISTORY OF JAPANESE LITERATURE”を資料として—」淑徳大学『総合福祉研究』, pp.107-114
- (8) 内村鑑三（1941）『代表的日本人』岩波文庫, p.11
内村鑑三（1964）『後世への最大遺物』岩波文庫, p.54
黒岩一郎（1967）『新講 報徳記』明德出版社,

- pp.12-13, pp.29-32, p.401
 黒岩一郎 (1978)『新講 二宮尊徳夜話』明徳出版社, pp.38-39, pp.52-53, p.58
 肖像写真の引用, 唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』上巻, ぎょうせい, p.263, p.264, p.267
- (9) 大槻真一郎著・澤元互監修『サレルノ養生訓とヒポクラテス—医療の原点—』コスモス・ライブラリー, p.16, pp.33-35, pp.115-117
- (10) 肖像写真の引用 唐澤富太郎編著『図説 教育人物事典』上巻, ぎょうせい, p.60, p.69, p.77
 唐澤富太郎 (1975)『教育的真実の探究—研究者の自伝的回想—』ぎょうせい, pp.7-8
 唐澤富太郎 (1954)『中世初期仏教教育思想の研究』東洋館出版社, pp.25-26
 土井進 (2022)「唐澤富太郎が究明した親鸞・道元・日蓮の「人間観・教育観」の考察—大脳生理学の「人間性」についての知見を援用して—」『茗溪社会教育研究』第13号, 筑波大学人間系生涯学習・社会教育学研究室, pp.3-15
- (11) 土井進 (2010)『周禮 15 講—「先生」の教育—』信州大学教育学部, pp.45-47
- 吉田光由 (1631)『塵劫記』「三器, 或ハ三容器ノ協力関係」第二版三巻 48 条本に所収
 土井進 (2016)「教職志望学生が「三容器の協力関係」から学んだ「いじめ問題」に立ち向かう知恵」『淑徳大学人文学部研究論集』第1号, pp.45-55
- (12) 唐澤富太郎 (1977)『教育博物館』解説, 英文, pp.3-6
 土井進 (2020)「唐澤富太郎が究明した“もの”と“ところ”の相即の妙」『唐澤富太郎と教育博物館の研究—実物教育による“もの”と“ところ”の探究—』ジダイ社, pp.78-83
- (13) 学生が田定規の問題に取り組むために必要なことは, まず問題の説明をきちんと行うこと。次に解法の手順の説明を一步一步行い, 混乱が生じないようにすること。
 土井進ほか著『昭和天皇の侍従次長木下道雄に師事した 高田豊寿の周禮 100 講』周禮研究会 (未刊)
- (14) 土井進 (2020)「事上錬磨」『唐澤富太郎と教育博物館の研究—実物教育による“もの”と“ところ”の探究—』ジダイ社, p.8